

京都府南丹市美山町から考える 持続可能な地域づくり

伊地知 瑠奈、菊川 弥夢、駒井 映里、先田 葵希、
出島 瑞紀、舩越 友理子、前田 魁、望月 美那

はじめに

2019年9月26日から28日の日程で、京都府南丹市にある美山町に学生8名、教授1名の計9名で訪問した。国際学部グローバルスタディーズ学科斎藤ゼミでは、持続可能な開発と暮らしのあり方について学んでいる。そこで今回、「持続可能性」に焦点をあてた地域発展を目指す京都府南丹市美山町の活動から、地方の抱える問題点の改善・解決にむけた糸口を探すことを目的とし、現地を訪問した。美山町は京都府のほぼ中央に位置している美しい山々に囲まれた山間の町である。しかしながら、この美山町も深刻な過疎化問題を抱える地域の1つである。2008年に4820人だった美山町人口は、10年後の2018年において3784人と1000人を超す人口が減少している（南丹市役所2019）。このような数字からも、美山町が直面している問題の深刻さを読み取ることができる。

研修のスケジュールとしては、1日目に美山町森林組合へ出向き、組合員の廣瀬さんの話を聞いた後に、森林伐採の体験を行った（図1）。2日目は、南丹市役所職員の中野さんに美山町がこれまでに行ってきた地域復興や観光業への取り組みについてお話を伺った。その後持続可能な暮らしを実践しておられる植月千砂さんが営んでいるアースガーデンを訪問し、お話を伺った。3日目にはかやぶき屋根の家々が多く保存され、「かやぶきの里」として国内外問わず多くの観光客を集めている北集落を見学した。

本稿での情報は、基本的に現地訪問時に関係者から頂いた資料や当日伺ったお話に基づいて記載する。



図1 間伐体験の様子

1. 美山町森林組合

美山町森林組合は1995年に、森林の機能維持・活用のために設立された組合である。主な活動内容としては、植林、造林、間伐、搬出などが挙げられる。そして、この森林組合は、現在、様々な時代背景のもとで生じた、3つの問題に直面している。

まず1つ目の問題は、森林の経済的価値の低下による、管理不足や世代交代の失敗である。林業は、1965年から1975年頃までは非常に栄えていた。しかし、1975年以降、鉄材の普及により木材の価値が低下した。それにより、森林の手入れ不足や荒廃が引き起こされた。この荒廃は、木材価値の高い木を減少させ、さらなる林業の衰退に拍車をかけた。また、人が山に入らなくなったことによって、鹿などの動物による森林被害も増加した。

2つ目の問題は、森林所有者の高齢化問題である。近年、農村部から都市部への人口流出によって、農村部の少子高齢化がますます進んでいる。この現象により、山を相続するはずの若者は都会に行ってしまう、森林への関心も薄れてきてしまっている。これらの事実は、森林の未来を考える上でも非常に深刻な問題である。

3つ目の問題は、美山町森林組合の人手不足の問題である。美山町の少子高齢化や若者の都市部への流出によって、森林組合は深刻な人手不足に陥っている。また、美山町にも外国人労働者は在住しているが、単純作業ではない林業の職務において、1年や2年など短期間で日本へやってくる外国人労働者の雇用は認められていない。これらの背景は、新たな労働力の確保を困難にしている。

これらの問題に対して、美山町森林組合は、主に2つの対策を行っている。1つ目の対策は、山の所有者や相続者への歩み寄りである。山の管理不足や、それによる森林の経済的価値の低下を防ぐためには、所有者や相続者に、山に対して関心を持ってもらう必要がある。そこで、美山町森林組合は山の所有者に対して、山の整備方法の提案、間伐、皆伐、再造林、里山としての活用、そして間伐による売上げの所有者への還元という、提案型林業を行っている。これらの活動によって、最近では林業に興味を持つ人が増えてきているという。また、さらなる森林の活用や林業の振興を目指し、各地域にある造林組合と共に将来美山町の山林をどのように扱うかの話し合いを行い、地域とのつながりを強めているという。

2つ目の対策は、人手不足の解消に向けた外国人労働者の受け入れに向けた準備である。実際、外国人労働者の林業への従事は現在のところ認められていない。しかし、これまで認められていなかった外国人労働者の雇用を進めることは、人手不足解消と、林業への関心を新たに生むきっかけになると考え、外国人労働者の受け入れに対し、積極的な姿勢を示しているのである。

2. 京都府南丹市役所

2-1. 都市との交流

京都府南丹市役所は、美山町を活性化するために様々な活動を行ってきた。1つ目の活動として、都市との交流の促進が試みられた。具体的な内容としては、美山の豊かな自然を生かした活動が挙げられる。美山には芦屋原生林、由良川などの貴重な自然、そして風情漂う景観が美しいかやぶき屋根があり、それらが評価され昭和63年度に「第3回全国農村アメニティコンクール」で優秀賞を受賞した。

受賞後、都市に住む芸術家などのあいだで移住希望者が急増した。そこで、美山町では移住者へ土地や住宅を斡旋する「美山ふるさと株式会社」を1992年に設立し、定住促進部門を整備した。この「美山ふるさと株式会社」の他にも地域資源の有効活用や地元雇用の創出のためにミネラルウォーターやお茶、コーヒーなどの製造販売をする「美山名水株式会社」を1995年に設立した（現在は民間企業）。このように、美山町は株式会社を立ち上げ移住者の受け入れや地域資源の有効活用を行っている。

2-2. 保存地区への歩み

2つ目の地域活性化活動は、かやぶき屋根の保存である。昭和40年代半ばに行われた文化財の予備調査で、北集落のかやぶき民家群については保存すべき貴重なものであると判断された。だが、当時は高度成長期であり、住民は快適で便利な生活環境を期待しており、かやぶき屋根を残したいと考える人がいなかった。また、当初地元住民の中で、かやぶき屋根は瓦にすることができなかった「貧乏の象徴」という考えが強かった為、保存することは恥ずかしいことであると考えられていた。だが、時代は変わり、高度経済成長の弊害で都市の生活環境の悪化が問題となり、人々は田舎に対して興味を持つようになった。また、この頃行政は地域活性化に対して美山町のブランドづくりを意識し始めていた。このようなことがあり、昭和63年に文化庁が文化財の最終候補地として北集落を選んだ。そこで、かやぶき屋根の保存地区選定のため、学習会や視察研修を行った。また、来訪からの意見を何度も聞いた。このような過程を経て、1年間で200回以上の会議をして100%の地元合意を得ることができた。この地元住民の全員一致での合意は前例が無かった。そして、平成5年12月8日に正式に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。このように、以前は「貧乏の象徴」であったかやぶき屋根は、住民と行政の合意によって美山町の貴重な観光資源へと変貌した。この背景にある大事なことは、行政と住民が長い時間をかけ、お互いが納得するまで話し合うことができる関係性である。

2.3. 新産業おこし

3つ目の活動は、新産業おこしである。この活動の特徴は、都市と農村の交流を盛んにすることによって、美山町を盛り上げ、美山町に何度も来てくれる人・住居する人を増やすことを目指している。そのために、美山町が行っていることは複数ある。美山の美しい風景を撮りたい写真家向けの「美しい美山の景観写真コンテスト」や、美山を描きたい人びと向けの「芸術の里京都美山絵画コンテスト」など、美山町ならではの自然を生かしたイベントは多くの人に好まれている。実際に、美山の自然を楽しんでもらえるように、インストラクター付きの「芦生ハイキング」なども行っている。このように、美山町全体で町おこしを行い、美山町に何度も来てもらえるよう工夫をし、美山町に住んでもらえる人びとを少しでも増やすような活動をしている。しかし、リピーターを増やすことは容易ではなく、来客数も観光収入も減少することもあった。

そんな中で、美山町が2001年頃から力を注いだことは、修学旅行の取り組みである。最近の中学生や高校生の修学旅行では、民泊学習をする学校も多い。修学旅行は今まで「観る観光」であったが、「体験・行動する観光」へと変化し始めており、新たな修学旅行の形態が人気となっている。美山町もなるべく学校側の要望を受け入れようと、努力している。例えば、修学旅行の受け入れが始まったときは、子どもの受け入れをしてくれる民家は少なかったため、観光協会の方が、一軒一軒民家を回り、経緯や修学旅行生を受け入れる意義などを説明して、受け入れをお願いした。この修学旅行の受け入れに力を入れることによって、将来の来客数増加にも繋がる、と考えた。人間は学生の頃に行った修学旅行先には大人になってから再度訪問する傾向があるとされている。確かに、子どもの時に行った美山町と大人になってから行った美山町はおそらく見え方・感じ方が異なるので、もう一度思い出の場所に行ってみたいと思うかもしれない。このように、美山町は、都市と農村の交流を大切に、村おこしを行ってきた。

2.4. 住民主導の街づくり

4つ目の段階として、「日本一の田舎づくり」を

目的とした住民主導のまちづくりが行なわれている。その背景には、年々加速する少子高齢化と人口減少による既存組織の弱体化があげられる。各集落の役員として選ばれる住民が高齢となり、一人が複数の役割を担うという状況において、地域づくりに向けた組織運営を継続することが困難となった。

そこで、今後の地域振興を題に、5つの旧村（小学校単位）の間で、話し合いが繰り返し重ねられた。その結果、平成13年4月に住民が主体となって運営する「振興会」がそれぞれの村に設立されることとなった。振興会は住民と行政を結ぶ組織として位置付けられ、各地域には行政職員が2名ずつ派遣されている。ここでの職員の役割とは、振興会が展開する事業の支援であり、住民自らが主体となって地域振興に向けた企画立案を行う点が重要な特徴だと言える。振興会は、①企画総務部（地域の将来計画樹立・住民要望の実現）、②地域振興部（地域振興／環境保全／保健福祉の面から住民の生活向上）、③生涯学習・社会教育部（住民の教養向上と健康の増進）の3部制で組織されており、それぞれの活動を通じて個性ある山村地域「日本一の田舎づくり」が目指されている。

このように、美山町では、①豊かな自然を活かした都市との交流、②かやぶき家屋群の保存地区認定、③修学旅行生受け入れを含めた新産業おこし、④振興会設置、といった地域活性化に向けた様々な取り組みが行われてきた。そして、それらは地域住民と行政職員の協働によって実現されたと言える。住民と職員が時間をかけて話し合いを重ねることで、互いに対する信頼を構築し、地域の持続可能な発展を共に目指すことができた。この点は、美山町のまちづくりにおいて非常に重要な特徴であったと結論づける。

3. アースガーデン

アースガーデンは、2002年に植月千砂氏によってはじめられた持続可能な暮らしを追求する試みの1つである。その基本的考え方はパーマカルチャーである。パーマカルチャーとは、パーマネント（permanent 永続的な）と、アグリカルチャー（agriculture 農業）からなる造語である。アースガーデンでは、パーマカルチャーを支える自給用オーガニ

ックガーデンを中心としつつも、それに加えて生ゴミコンポスト、雨水タンク、バイオガス発生装置、薪ストーブ、ペレットストーブ、太陽熱温水器やソーラーパネルを備え、地球に優しい生活を1つのモデルとして提示している。そのため、多くの訪問者がこの地を視察し、これまでも多大な示唆を得てきた。

植月氏は、もともとは英語を教える教員であったが、1980年代から社会のあり方に疑問を持ち始め、環境保護運動に参加していった。1997年には京都議定書が採択されるが、この会議を契機にさまざまな環境NGOの運動家たちが連携するようになった。植月氏は、翌年パーマカルチャーの本場のオーストラリアに行き、そこでパーマカルチャー・デザインの資格を取得する。帰国後は大阪府高槻市の集合住宅のバルコニーで環境との共生を目指したガーデンニングを行う。その後、縁あって美山へ移住し、アースガーデンをはじめることになる。

パーマカルチャーは、持続可能な農と食を実現するために12の設計原則を重視したシステム全体を作り上げる試みである。ここでシステムと言う時、農法のみを指すのではなく、農と食を包み込む社会や経済のあり方を地域に根付いた形で展開しようとするのが重要である。そのため、パーマカルチャーの目的は、単においしい野菜を育てることではなく、持続可能な社会を実現すること、最近の用語で言えばレジリエンス（さまざまな困難を克服できるしなやかな社会）を実現することである。

植月氏は、集合住宅の時代からの取り組みで、例えばどのような野菜の種と草木と一緒に植えられれば、害虫抑制に役立つかを学び経験してきた。時には有機農家やガーデナーの常識に反するような発見もこれまでにされてきた。パーマカルチャーといえ、日本でも海外でも、比較的大規模な農の暮らしのデザイン事例に注目が集まる。それに対して、小規模な家庭でも実現できる1つのモデルを提示していることの意味がこのアースガーデンにはある。何よりもそれが、ここへの見学者が絶えない理由と言えよう。

4. かやぶきの里

上記の「2-2. 保存地区への歩み」で述べた過程

を経て、現在美山町において重要な観光地となっているのが、我々が3日目に訪れたかやぶきの里である（図2）。美山町のかやぶき屋根は、「北山型入母屋造」と呼ばれる屋根の形状をしている。これは、京都の影響もあり繊細で女性的な美しさがありながらも、日本海側特有の冬の豪雪にも耐えられるという特徴を併せ持つ造りである。また、かやぶき屋根の家屋には人々の様々な知恵が詰まっている。例えば、かやぶき屋根の民家は、木・土・紙・茅といった建築資源を用いて作られており、古くなった資材についても再利用されることから、非常に環境に優しい建築様式として考えられている。また、高い天井と広い間取りという内装についても、夏は涼しく冬は暖かく過ごせるように工夫して設計されており、冷暖房に必要なエネルギー消費を抑えるという工夫・良点がある。このように、昔では一般的な家屋とされていたかやぶき屋根の民家には、自然への配慮や人々の知恵がたくさん詰まっているのである。



図2 かやぶきの里

まとめ

今回の美山町への合宿を通して、重要だと考えたポイントは2つある。1つ目は、行政と市民との関わりが深いことは、町全体で一丸となることができるという利点である。町おこしや地域活性化を行うにあたって、どちらか一方だけの働きだけでは、成功する可能性は低い。だからこそ、行政と市民が密にコミュニケーションを取り、何を目標とし、どのような取り組みが必要なのかを共に考えることが重要なのだ。実際に、美山町は、市民を巻き込んで

様々な事業に取り組んで、美山に住んでいる人も住んでいない人も満足できるような町おこしを行うことができている。2つ目は、持続可能な生活を送るためにも、人間と自然の共生は好ましいことであるという点である。都市部に住んでいると、なかなか自然と触れ合う機会が少なく、「便利すぎる」生活に慣れてしまう。しかし、今回の美山町への訪問を通して、森林を守っていくことの意義や、かやぶき屋根などの資源の偉大さなどを知ることができ、自然と共生することによって、人間のためにも自然のためにもなるのではないかと考えた。都市化が進み、「便利すぎる」生活が好まれる傾向があるが、

いわゆる「田舎らしい」生活も未来への持続可能な生活への財産となるため、人間と自然の共生は必要だと感じた。

謝辞

今回の訪問にあたってはここに記載された方々の多大なご協力を頂きました。ここに御礼申し上げます。

参考文献

南丹市役所 2019「美山町の概要」訪問時配付資料
堂下恵 2012「里山観光の資源人類学：京都府美山町の地域振興」新曜社